

吹越(2)遺跡

－ 国道279号横浜南バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告 －

2022年3月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第628集

吹越(2)遺跡

－ 国道279号横浜南バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告 －

2022年3月

青森県教育委員会

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、国道279号横浜南および北バイパス道路改築事業に伴い、令和2年度に吹越(2)遺跡の発掘調査を実施しました。当センターでは、これまで本事業に伴い林ノ脇遺跡、百目木(3)遺跡の調査を行っており、縄文時代の狩猟場や平安時代の集落跡などが発見されてきました。

吹越(2)遺跡では、縄文時代の落とし穴が発見され、遺跡周辺が狩猟場であったことが明らかとなりました。

この成果が今後、埋蔵文化財の保護と研究に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている青森県県土整備部道路課に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

令和4年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 葛西浩一

例 言

- 1 本書は、青森県県土整備部道路課による国道279号横浜南バイパス道路改築事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが令和2年度に発掘調査を実施した横浜町吹越(2)遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は3,500㎡である。
- 2 吹越(2)遺跡の所在地は青森県上北郡横浜町字吹越地内、青森県遺跡番号は406030である。
- 3 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した青森県県土整備部道路課が負担した。
- 4 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	令和2年5月7日～同年6月26日
整理・報告書作成期間	令和3年4月1日～令和4年3月31日
- 5 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター小山浩平文化財保護主幹が担当した。依頼原稿については文頭に執筆者名を記した。
- 6 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務を依頼および委託により実施した。

地形と地質現地鑑定、石質鑑定、遺跡及び周辺の地形・地質原稿	青森県立郷土館学芸課長 島口 天
空中写真撮影	有限会社 無限
- 7 発掘調査成果の一部は、当センターホームページにおいて公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がこれらに優先する。
- 8 本書に掲載した地形図(遺跡位置図等)は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「陸奥横浜」、「有畑」、「近川」を複写・加工して使用した。
- 9 計測原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。
- 10 挿入図の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。
- 11 遺構には、その種類を示すアルファベットの略号に検出順位を示す算用数字を遺構ごとに付した。使用した略号は、以下のとおりである。溝状土坑-SV
- 12 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。各土層の色調表記等には、『新版標準土色帖2005年版』(小山正忠・竹原秀雄)を基に記録した。
- 13 各挿入図中の遺構実測図の縮尺は、原則として1/60とし、スケールを示した。路線図、遺構配置図等は適宜縮尺を変更し、挿入図にスケールを示した。
- 14 土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付している。
- 15 遺構規模に関する計測値で、調査区域外に延びているもの、他遺構・攪乱によって壊されているものは()を付して現存値を記載した。
- 16 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 17 発掘調査及び整理、報告書作成に際して、下記の機関と方々からご協力、ご指導を得た(敬称略、順不同)。横浜町教育委員会、瀬川 滋

目 次

序	
例 言	
目 次	
図版目次	
表目次	
写真目次	
第1章 調査の概要	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
1 発掘調査の方法	1
2 整理・報告書作成作業の方法	1
第3節 調査の経過	3
1 発掘調査の経過	3
2 整理・報告書作成作業の経過	4
第2章 遺跡の環境	
第1節 遺跡周辺の歴史的環境	5
第2節 遺跡周辺の地形・地質と基本土層	9
第3章 検出遺構と出土遺物	
第1節 溝状土坑	13
第2節 遺構外出土遺物	15
第4章 総括	18
引用・参考文献	18
写真図版	19
報告書抄録	23

図版目次

図1	遺跡位置と調査区域図	2
図2	周辺の遺跡	6
図3	吹越(2)遺跡周辺の段丘区分図	10
図4	基本土層	11
図5	遺構配置図	12
図6	遺構外出土遺物	15
図7	溝状土坑(1)	16
図8	溝状土坑(2)	17

表目次

表1	周辺の遺跡	8
表2	遺構計測表	15
表3	遺物観察表	15

写真目次

写真1	遺跡位置	19
写真2	調査区全景、基本土層	20
写真3	溝状土坑(1)	21
写真4	溝状土坑(2)、作業状況、遺構外出土遺物	22

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

国道279号道路改築事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱については、青森県教育庁文化財保護課（以下、文化財保護課）と青森県県土整備部道路課及び上北地域県民局地域整備部（以下、事業者）が、平成26年度から継続的に協議及び現地踏査を行っており、状況が整い次第、文化財保護課が試掘・確認調査を実施してきた。

吹越（2）遺跡は、令和元年度に行われた文化財保護課による試掘調査により周知の埋蔵文化財包蔵地として新規に登録され、同年度に行われた文化財保護課と事業者の協議により令和2年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施することとなった。

文化財保護法第94条第1項による土木工事等のための発掘に関する通知は、上北地域県民局長から令和2年3月4日付け上県局整備第1958号で提出され、これを受けて工事着手前の発掘調査の実施が、青森県教育委員会教育長から令和2年3月12日付け青教文第1435号で通知されている。

第2節 調査の方法

1 発掘調査の方法

包含層の有無や遺構密度等を確認するためトレンチ調査を先行させた。遺構検出後は遺構の構造や遺物の構成を把握できるような調査方法を採用した。

〔測量基準点・水準点の設置・グリッドの設定〕測量基準点は既存の幅杭にZ値を付与されたものを使用した。調査区内における公共座標軸と位置関係、及び主要基準点については遺構配置図(図5)に示した。グリッドは世界測地系による国土座標値を基準として4×4mで設定し、原点A-0は平面直角座標第X系のX=113760・Y=35540とした。グリッド名は南から北へ算用数字、西から東へアルファベットを組み合わせた名称を付し、その南西隅の組み合わせで呼称した。

〔基本土層〕基本土層については表土から順にローマ数字を付した。

〔表土等の調査〕文化財保護課が実施した確認調査、及びトレンチ調査の結果を踏まえ、状況を確認しながら重機を使用し、掘削の省力化を図るように努めた。

〔遺構の調査〕検出した遺構には、確認順に番号を付けて精査した。堆積土層観察用のセクションベルトは基本的に2分割で設定した。遺構内の堆積土層には算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。遺構測量は現場職員がトータルステーションを用いて平面図や地形図を計測したほか、簡易遺り方測量で断面図を作成した。

〔写真撮影〕35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルム及び約1800万画素のデジタルカメラを併用し、遺構の検出状況、遺物の出土状況、発掘作業状況等について記録した。また、ドローンによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影も行った。

2 整理・報告書作成作業の方法

吹越（2）遺跡では、溝状土坑10基が検出され、縄文時代の磨製石斧1点が出土した。

〔図面類の整理〕遺構の平面図は、トータルステーションで作成した測量データを、株式会社CUBIC製「遺構くん」（遺構実測支援システム）で読み込み、整理を行った。縮尺は原則として1/20を用い、

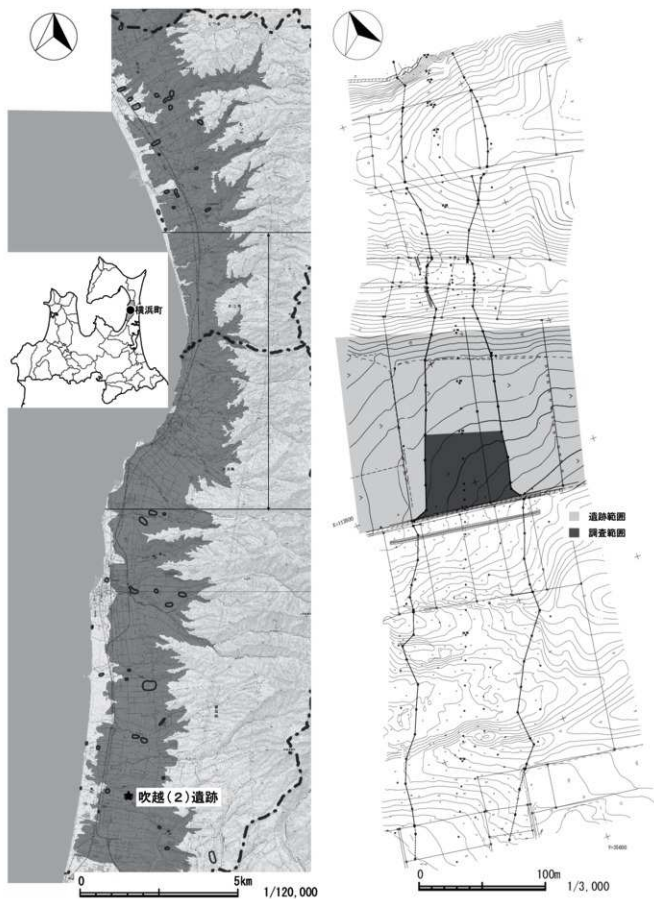


図1 遺跡位置と調査区域図

簡易遺り方測量等で作成した土層断面図等との図面調整を行った。また、遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

[写真類の整理] 35mmモノクロームフィルム、35mmカラーリバーサルフィルム共に撮影順にネガアルバムに収納した。デジタルカメラのデータは、発掘作業状況、遺構毎の検出・精査状況等に整理してハードディスク・ブルーレイディスク等に保存した。

[遺物の洗浄・注記と接合・復元] 収納したポリ袋に調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記した。

[遺物の観察・図化] 十分に観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。

[遺物の写真撮影] 実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。

[遺構・遺物のトレース・版下作成] 遺構・遺物の実測図やその他挿図のトレースは、株式会社CUBIC製「遺構くん」(遺構実測支援システム)、「トレースくん」(遺物実測支援システム)を用いてデジタルトレースを行った。図版の版下作成はAdobe社製Creative Cloudの「PhotoShop」、「Illustrator」、「InDesign」を用いて行った。

[遺構の検討・分類・整理] 遺構ごとに構造的特徴をまとめ構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。

第3節 調査の経過

令和2年5月7日～同年6月26日までの期間で3,500㎡を対象として調査を行った。整理・報告書作成作業は写真類や遺構データの整理作業など調査終了後に先行して行ったものもあるが、主として令和3年4月1日～令和4年3月31日までの期間で行った。

1 発掘調査の経過

[調査体制]

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 佐藤 禎人 (現青森県立図書館館長)

次長 川村 和夫 (現青森県立梵珠少年自然の家所長)

調査第一GM 鈴木 和子

文化財保護主幹 齋藤 正

文化財保護主幹 小山 浩平

専門的事項に関する指導・助言

調査員 三浦 圭介 青森中央学院大学非常勤講師 (考古学)

〃 工藤 竹久 青森県文化財保護審議会委員 (考古学)

〃 根本 直樹 国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師 (地質学)

〃 島口 天 青森県立郷土館学芸課長 (地質学)

[調査経過]

4月下旬 重機を用いて表土剥ぎ作業を行った。

- 5月7日 発掘調査機材を搬入して調査を開始した。
- 5月 上旬は引き続き重機による表土剥ぎ作業と作業員による検出作業を並行して行い、中旬には漸移層上面での検出作業を終えた。この面ではトレンチャー痕が非常に密で(図5)遺構検出が困難な状況であったため、検出しやすい任意の高さまで掘り下げることとした。結果、溝状土坑しか検出されず調査期間の短縮が見込まれたため、文化財保護課と事業者が協議を行い、7月17日までの予定を6月26日までとした。
- 6月 再び重機による掘削作業を進め、人力による検出作業を行った。総数10基の溝状土坑を検出し、精査を進めた。また、上旬には、島口調査員(青森県立郷土館学芸課長)から地形・地質についての現地鑑定を受けた。
- 6月26日 全ての作業を終了し、撤収した。

2 整理・報告書作成作業の経過

[整理体制]

整理主体	青森県埋蔵文化財調査センター
所長	葛西 浩一
調査第一GM	鈴木 和子
文化財保護主幹	小山 浩平

[整理・報告書作成作業の経過]

- 4～12月 遺構の図面調整を行った。周辺の地形と地質について島口天氏(青森県立郷土館学芸課長)に原稿執筆を依頼した。
- 12～2月 調査成果を総合的に検討しながら原稿や遺構・遺物図版、写真図版等を作成し、報告書の割付・編集を行い、印刷業者を入札・選定して入稿した。
- 3月16日 校正を経て報告書を刊行した。
- 3月下旬 記録類・出土品を整理して収納し、全ての整理作業を完了した。

(小山)

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡周辺の歴史的環境

横浜町は南北半島の中間部に位置し、西側には陸奥湾、東側には吹越烏帽子岳などがそびえる山岳地帯に面しており、古来、自然の恩恵を受けてきた町とすることができる。現在は菜の花の栽培・加工、ジャガイモの栽培、ホタテの養殖が主な産業となっている。また、横浜沖でとれるナマコは食感が柔らかく『よこはまナマコ』としてブランド化されている。そのほかに真鯛釣りのメッカとしても有名である。

1 横浜町内の遺跡

横浜町内には令和3年4月現在で縄文時代早期～晩期、弥生時代、平安時代、中世～近世の集落跡、生産遺跡（製塩）、城館跡など30カ所の遺跡が登録されている（図2）。発掘調査は横浜北バイパス道路改築事業等に伴い林ノ脇遺跡（図2-18）、百目木（3）遺跡（図2-29）が行われたほか、松木遺跡（図2-06）、松守遺跡（図2-19）、モダシ平遺跡（図2-27）などでも行われている。また、青森県が行った遺跡分布調査などでは近世の塩竈跡が吹越遺跡（図2-09）、百目木（2）遺跡（図2-13）、雲雀平（4）遺跡（図2-28）などで発見されている。以下にこれまでの調査成果や研究成果を踏まえながら、各時代の特徴を概観する。

・旧石器時代

吹越の海岸付近で細石刃と思われる石器が採取されている（角鹿1980）。なお、吹越と近い野辺地町目ノ越の海岸線ではナイフ型石器と思われる石器が出土している。

・縄文時代

林ノ脇遺跡で縄文時代早期前葉の日計式期の土坑1基と、剥片石器を主体とした遺物集中ブロックが5カ所検出された（青理報第620集）。ブロックから出土した炭化物を年代測定した結果、約1万年前との結果が得られた。吹越周辺で旧石器時代終末期の細石刃（1万3～5千年前）、ナイフ型石器（約2～3万年前）が採取されている状況を考慮すると、海岸線～標高30m範囲内（海成段丘m75c, e'（図3））には古い年代の遺跡が埋もれている可能性もある。中期以降になると林ノ脇遺跡、百目木（3）遺跡（青理報第622集）、吹越（2）遺跡（本報告書）、モダシ平遺跡で溝状土坑が検出され、標高20～40m付近の河川に面した段丘縁が狩猟場として利用されたことが分かる。後期では烏帽子平遺跡（図2-07）、荒内川（2）遺跡（図2-15）、太郎須田遺跡（図2-20）で後期前葉の遺物が採取され（遺跡台帳）、モダシ平遺跡では後期後葉の遺物が出土している（青理報第271集）。晩期では松木遺跡から晩期中葉の遺物を多量に含んだ層が検出されている（横浜町教育委員会1983）。遺構は検出されなかったが、周辺にはこれらの供給源となった集落の存在が想定される。また、遺跡からは製塩土器も出土している。横浜町の地理的環境を考慮すると搬入品ではなく、塩作りが行われていた可能性が高いと考えられる。

・弥生時代

町内では中期以降の遺構、遺物が確認されている。とまり川（2）遺跡（図2-02）遺跡では鋸歯状および平行沈線が施文された遺物が採取されている（遺跡台帳）。詳細は明らかではないが中期以降の土器と判断できる。明神平遺跡（図2-04）では、中期後葉の念仏間式土器が採取されている（遺跡台帳）。後期になると、百目木（1）遺跡（図2-12）、林ノ脇遺跡、モダシ平遺跡で遺物が出土、採取されている。いずれも交互刺突文や縞縄文ともよばれる条間が広く開いた地紋が施されており、近い時期の遺跡と捉えることができる。林ノ脇遺跡では竪穴建物跡が1棟検出されている。

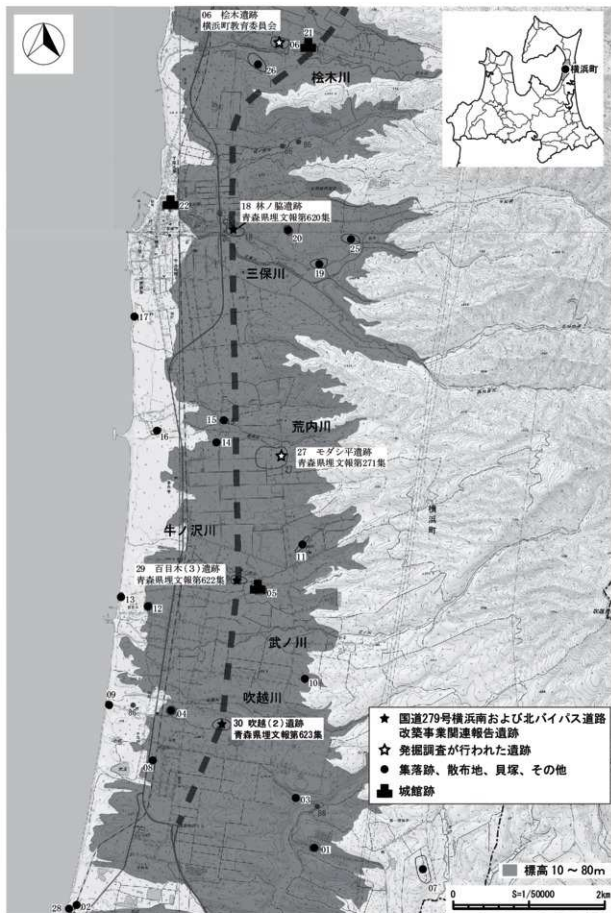


図2 周辺の遺跡

・平安時代

林ノ脇遺跡で当時の生活を窺い知ることができる興味深い調査結果が得られている(青埋報第620集)。10世紀後半を主体とする集落跡で、堅穴建物跡は22棟検出されている。食に関わるものとしては、イネやアワなどの穀類が出土しており、その一部は冷害を受けて成長が阻害されたと思われるものも含まれている。また、イガイ、アサリ、カキの貝類も出土しており、現在と同様に海の恵みを受けていたものと思像される。一方で堅果類がほとんど確認されていないという指摘がされており興味深い。また、製塩土器や製塩に関わりが深いと思われる土製支脚が出土しており、縄文時代以来、沿岸域で製塩が行われ集落内で消費していた可能性が提起された。生業に関わるものとしては土師器のほか鉄製品も出土しており、農具としての手鎌、木工具としての槍鉋、鑿もしくは鑿、釘の可能性のあるもの、切削具としての刀子、武器としての鉄鎌、刀装具の可能性のあるもの、宗教用具としての鉄鐺などが確認されている。なお、精錬～鍛錬までを行う鍛冶炉が検出されており、これらの製品は集落内で製作されていた可能性もある。交易という面では北海道との関連を示す遺物も出土している。

・近世以降

製塩遺跡として吹越遺跡(図2-09)、百目木(2)遺跡(図2-13)、雲雀平(4)遺跡(図2-28)が、城館跡として牛ノ沢遺跡(図2-05)、寺屋敷(図2-21)、横浜館(図2-22)が登録されている。

雲雀平(4)遺跡からは塩窯3基が発見されているほか、16世紀末から17世紀初頭にかけての陶磁器も採取されている(瀬川 2006)。他の製塩遺跡も塩窯跡の構造からほぼ同時期のものと考えられる。館跡では牛ノ沢遺跡から16～17世紀の陶磁器が採取されている。このように、遺跡から出土する資料は近世以降のものばかりで中世期のものは見られず、遺跡からみると中世は空白期となる。次に文献資料から中世以降の様子を見ていくこととする。

2 文献から見る中世以降の横浜町

横浜町史編纂委員会の刊行した「横浜町郷土史年表」によると、中世末期の1555年に南部氏の支配が及んだことを契機として町内の開発が進んでいく様子が記されている。資料からは造船や塩窯の操業、松木材および海産物(干シナマコ)の売買などで栄えた状況が看取できる。遺跡と対比してみると、塩窯や牛ノ沢遺跡から出土した遺物と年表の事項は概ね一致しており、開発が進んだ結果、牛ノ沢式部のように館跡を持つような富豪ないしは土豪が台頭してきたことも考えられる。しかし、18世紀に入ると燃料用の木材や、松木材が切絶えた村もあり、徐々に衰退していったようである。町内で当該期の遺跡が発見されていないことも符合する。なお、年表にはこれと歩調を合わせるかのようにな代官所のある野辺地町が発展していった様子が記されている。

3 遺跡の立地について

海岸線には製塩関連の遺跡群が分布しているほか、海岸線沿いに形成された海成段丘上(図3)には旧石器時代～縄文時代早期の遺跡が立地している。また、河川沿いの段丘上標高約80m内には各時代の遺跡が分布している(図2)。遺構の検出状況としては、林ノ脇遺跡の調査で段丘縁辺部に近いほど密度が高くなる状況が看取されている。なお、横浜町松木からむつ市近川に至る直線にして約9kmの範囲内と、吹越の泊川流域、百目木の武ノ川流域沿いが遺跡の空白域(図1)となっているが、地形的要因を考慮すると遺跡が存在している可能性は高い。

表1 周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代	種別	備考
01	とまり川(1)遺跡	縄文(後期)	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
02	とまり川(2)遺跡	弥生	散布地	
03	雲雀平(1)遺跡	縄文(中・後・晩)	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
04	明神平遺跡	縄文(晩)、弥生(後)	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
05	牛ノ沢遺跡	中世	城館跡	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集 1983 青森県の中世城館
06	松木遺跡	縄文(後・晩)	集落跡	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集 1983 松木遺跡 (横浜町教育委員会)
07	烏帽子平遺跡	縄文(後・晩)	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
08	中吹越遺跡	平安	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
09	吹越遺跡	平安、近世	貝塚 その他	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
10	松栄遺跡	縄文	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
11	向沢遺跡	縄文	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
12	百目木(1)遺跡	弥生、中世	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
13	百目木(2)遺跡	平安、近世	散布地 生産遺跡	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
14	荒内川(1)遺跡	縄文(晩)	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
15	荒内川(2)遺跡	縄文(後・晩)	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
16	荒内川(3)遺跡	平安	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
17	横浜遺跡	平安	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
18	林ノ脇遺跡	縄文(早～晩期) ・弥生・平安 ・中世・近世	集落跡	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集 1994 青森県埋蔵文化財調査報告書第165集 2021 青森県埋蔵文化財調査報告書第620集
19	松守遺跡	縄文(晩)	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集 1994 青森県埋蔵文化財調査報告書第165集
20	太郎須田遺跡	縄文(後)	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
21	寺屋敷	中世	城館跡	1983 青森県の中世城館
22	横浜館	中世	城館跡	1983 青森県の中世城館
25	松守(2)遺跡	縄文	散布地	
26	家ノ前川目遺跡	縄文	集落跡	1997 青森県埋蔵文化財調査報告書第227集
27	モダシ平遺跡	縄文、弥生、平安	散布地	2000 青森県埋蔵文化財調査報告書第271集
28	雲雀平(4)遺跡	平安、近世	散布地 生産遺跡	
29	百目木(3)遺跡	縄文・弥生	集落跡	2021 青森県埋蔵文化財調査報告書第622集
30	吹越(2)遺跡	縄文	集落跡	2022 青森県埋蔵文化財調査報告書第628集 (本書)

第2節 遺跡周辺の地形・地質と基本土層

青森県立郷土館 島口 天

吹越(2)遺跡周辺の地形について、水野・堀田(1970)を引用・補足して述べる。

本遺跡東方には、吹越烏帽子(標高507.8m)などで代表される標高500m前後の吹越烏帽子山地が南北方向に連なる。この山地を取り巻くように西～南側には吹越烏帽子丘陵が広がるが、開析のあまり進んでいない丘陵地であるため傾斜が緩やかで、谷密度もそれほど大きくない。さらにこの丘陵を取り巻くように西～南西側には横浜台地が広がり、三保川以南では台地の西側海岸線沿いに海岸低地が、牛ノ沢川以南では台地と海岸低地の間に吹越砂丘地が分布する。横浜台地は、標高の高い順に5面(Gt I+面、Gt I面、Gt II+面、Gt II面、Gt III面)の段丘面が区分されている。

本地域の段丘区分については、段丘面の形成年代と海成・河成の別を示すこと、後述のように三保川～武ノ川の間で高位の段丘面区分が難しいことを示すため、水野・堀田(1970)の区分ではなく小池・町田編(2001)に従い図3を作成した。次に、図3に示した段丘区分について述べる。

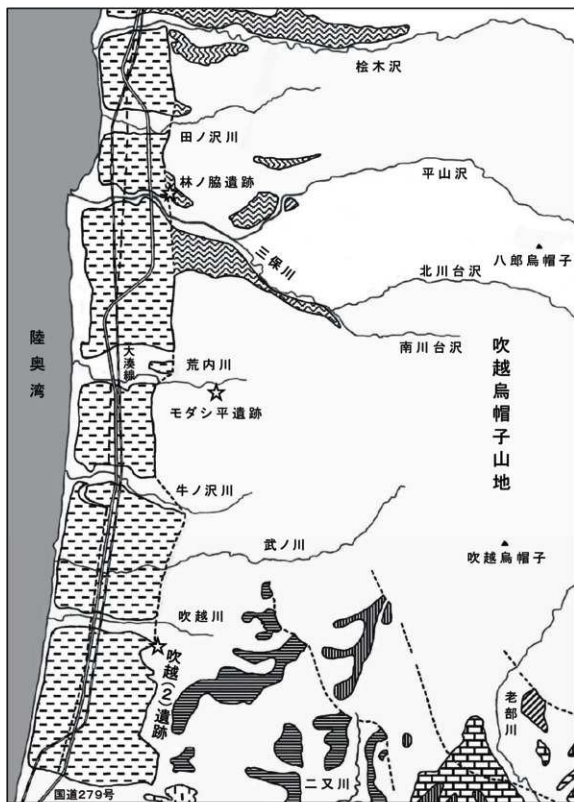
横浜町吹越から松木までの間には、南北に延びる陸奥湾岸沿いに海成段丘面mT5c, eが東西幅1～1.5kmで連続して分布している。この段丘面を吹越川などの河川が、東西方向に横切るように陸奥湾に注いでいる。mT5c, eは最終間氷期(酸素同位体ステージ5c, eに形成)に形成され、およそ南北に走る国道279号・大湊線を境に西側がmT5c, 東側がmT5eに分けられる。国道279号横浜北バイパス道路は、およそmT5eの汀線に沿って計画されている。これらの段丘面より東側は、武ノ川左岸側以南と三保川流域以北で上位の海成段丘面及び河成段丘面の分布が大きく異なる。

武ノ川左岸側以南には、吹越烏帽子山地に向かってmT5eから連続するように海成段丘面(mT7, mT9, mT11, mT13)および河成段丘面(fT11)が分布する。一方で三保川流域以北には河成段丘面(fT5e, fT7)が分布する。武ノ川右岸側以北でmT7～mT11の分布が見られないのは、これらの段丘崖がかなり不明瞭で、段丘面を覆うテフラが欠落していることが多いため、段丘の追跡が難しいことによる。

次に、本地域の地質について工藤ほか(2021)を参考に述べると、おおよそ山地や丘陵地には前期～中期中新世の泊層が分布し、台地には後期鮮新世～前期更新世の浜田層が泊層を不整合に覆って分布する。泊層は、玄武岩～安山岩溶岩、火山砕屑岩及び貫入岩を主体とし、凝灰質砂岩、礫岩及び軽石火山礫凝灰岩を伴う。浜田層は、砂層及び泥質砂層を主体とし、泥層、礫層、軽石火山礫凝灰岩及び凝灰岩を伴う。

工藤ほか(2021)の「古期扇状地及び河川成堆積物」の説明には「山地及び丘陵の縁辺には、山地及び丘陵の堆積物が再堆積した礫、砂及び泥から構成される古期扇状地及び河川成堆積物が分布する。これは、酸素同位体ステージ5の海成段丘堆積物に覆われることからこの年代より古いと判断、あるいは推定されるもので、開析された扇状地形や段丘地形を示し、地形面の保存は概して悪い。」とあり、武ノ川右岸側以北でmT7～mT11の分布が見られないことの原因として考えられる。

また、岩井(1970)の「火山灰岩盤」の説明には「いわゆる上位段丘として取り扱われている山麓に発達する丘陵性の台地で、段丘堆積物は全くみられず、ローム質火山灰が全面を覆っている。このローム質火山灰の下位は泊安山岩類(泊層)または浜田層が分布しており、これらもかなり風化が進んでいる。なお、この丘陵性の台地を刻む小谷には安山岩の垂角礫を含んだ山津波的泥流が埋積しており、岩盤の露出を殆どみることができない。(一部改変)」とあり、これも武ノ川右岸側以北でmT7～mT11の分布が見られないことの原因として考えられる。



【凡例】海成段丘(数字は酸素同位体ステージ、破線は旧汀線)



※Cは西側、eは東側

河成段丘(数字は酸素同位体ステージ)



図3 吹越(2)遺跡周辺の段丘区分図

吹越(2)遺跡の地形・地質

吹越(2)遺跡は吹越川下流部左岸側に合流する小谷の南側に位置し、mT5eの東端からやや東にはずれた位置にある。調査区域内の標高は41~44m、南東から北西に向かって緩く傾斜している。基本土層は調査区内の北西端付近に設定され、次のように区分される。

基本土層

- 第I層 黒褐色土 表土。
 第II層 暗褐色土 締りのないローム質土。
 第III層 褐色土 やや締りのあるローム質土。
 第IV層 褐色土 砂混じりのローム質土。
 第V層 黄褐色土 ローム質の砂。
 第VI層 浅黄色土 中～粗粒砂。

ラミナ等は見られず塊状だが、不明瞭ではあるが砂粒の粒度や色により斑模様を呈し、黒褐色砂粒の密集部が所々しみ状に見られる。下部には水酸化鉄よって砂粒が茶褐色に染まった部分が層状に広がり、層厚や色の濃淡は不定で、地下水脈の影響が考えられる。

第VII層 明褐色土

砂とシルトが不規則に不定形に重なり、黒褐色マンガング粒が散在する。河川の氾濫によって運ばれてきた砂やシルトが繰り返り重なり、複雑な堆積構造を形成したと考えられる。

調査区の南側や調査区西側を南北に走る道路沿いの墓地では砂丘砂が見られ、水野・堀田(1970)によると吹越砂丘地を構成する砂丘砂は、一部で台地上にせり上がっているということから、これに相当する砂丘砂と考えられる。

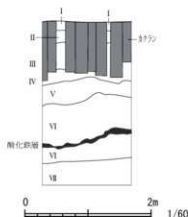


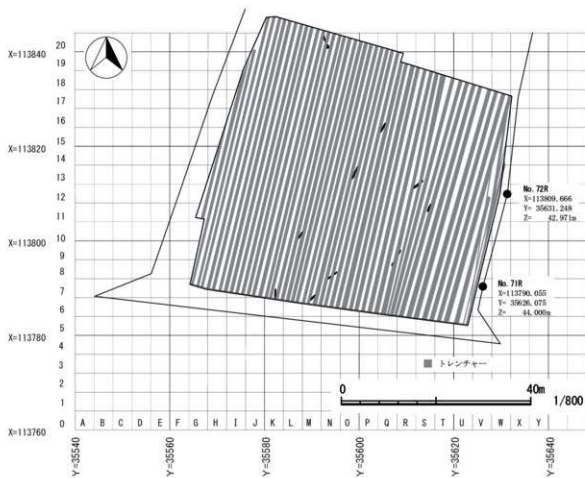
図4 基本土層



第VII層に見られる堆積構造

文献

- 岩井武彦(1970)5万分の1表層地質図。土地分類基本調査「陸奥横浜」,青森県,p.20-28
 小池一之・町田 洋編(2001)日本の海成段丘アトラス。東京大学出版会
 工藤 崇・小松原純子・内野隆之・昆慶明・宮川歩夢(2021)20万分の1地質図幅「野辺地」(第2版)。産業技術総合研究所 地質調査総合センター
 水野 裕・堀田報誠(1970)5万分の1地形分類図。土地分類基本調査「陸奥横浜」,青森県,p.15-19



Ⅱ層(漸移層)上面での検出状況

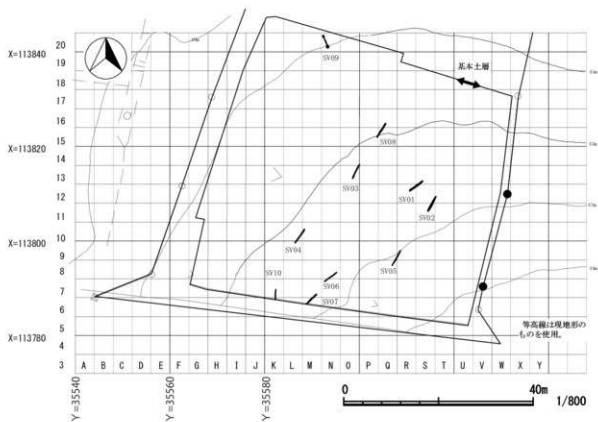


図5 遺構配置図

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 溝状土坑

標高40～44mの河岸段丘上に立地している調査区から、総数10基の溝状土坑を検出した。このうち、8基の長軸方向はN-30°～50°-E前後に集中しており、まとまりが見られる。唯一西方向へ傾いているSV09は、長軸の両端が膨らんだいわゆる鉄アレイ型をしており特徴的である。遺構同士による重複はない。遺物が出土しなかったため詳細な年代は不明であるが、これまでの調査・研究事例から概ね縄文時代中期以降に帰属するものと考えられる。また、表土直下の漸移層上面では長芋トレンチャーによる攪乱が激しく遺構検出が困難であったため、トレンチャーの影響を受けない任意の深さまで地山層を掘り下げている。そのため、本来の構築面よりもかなり下位で検出していることとなり、遺構規模や標高値などは機能時と大きく異なっている。

第1号溝状土坑 (SV01、図7)

[位置・確認]R、S-12、13グリッドに位置している。

[形状・規模]平面形は細長い長楕円形である。長軸方向はN-36°-E、規模は開口部で長軸361cm、短軸33cm、検出面からの深さは56cmである。底面は北東側が若干高くなっており、壁面は垂直に立ち上がっている。

[堆積土]3層に分層した。黒褐色土、暗褐色土を主体とする。

第2号溝状土坑 (SV02、図7)

[位置・確認]S、T-11、12グリッドに位置している。

[形状・規模]平面形は細長い長楕円形である。長軸方向はN-28°-E、規模は開口部で長軸372cm、短軸46cmで、検出面からの深さは80cmである。底面はほぼ平坦である。壁は南西側がオーバーハングしており、もう一方が開くように立ち上がっている。

[堆積土]5層に分層した。黒褐色土、暗褐色土を主体とする。

第3号溝状土坑 (SV03、図7)

[位置・確認]O、P-13、14グリッドに位置している。

[形状・規模]平面形は細長い長楕円形である。長軸方向はN-26°-E、計測規模は開口部で長軸344cm、短軸23cmで、検出面からの深さは32cmである。底面はほぼ平坦で、壁は開くように立ち上がっている。

[堆積土]黒褐色土の単層である。

第4号溝状土坑 (SV04、図7)

[位置・確認]I、M-9、10グリッドに位置している。

[形状・規模]平面形は細長い長楕円形である。長軸方向はN-34°-E、規模は開口部で長軸367cm、短軸23cmで、検出面からの深さは70cmである。底面はほぼ平坦で、壁は開くように立ち上がっている。

[堆積土]3層に分層した。黒褐色土、暗褐色土を主体とする。

第5号溝状土坑 (SV05、図7)

[位置・確認]Q、R-8、9グリッドに位置している。

[形状・規模]平面形は細長い長楕円形である。長軸方向はN-28° -E、規模は開口部で長軸376cm、短軸26cmで、検出面からの深さは49cmである。底面は南西側が若干高くなっており、壁は開くように立ち上がっている。

[堆積土] 2層に分層した。黒褐色土、暗褐色土を主体とする。

第6号溝状土坑 (SV06、図8)

[位置・確認]N-7、8グリッドに位置している。

[形状・規模]平面形は細長い長楕円形である。長軸方向はN-53° -Eである。計測規模は開口部で長軸336cm、短軸23cmで、検出面からの深さは58cmである。底面は北東側が若干高くなっており、壁は開くように立ち上がっている。

[堆積土] 3層に分層した。黒褐色土、暗褐色土を主体とする。

第7号溝状土坑 (SV07、図8)

[位置・確認]M-6、7グリッドに位置し、調査区外へ遺構の一部が伸びている。

[形状・規模]平面形は細長い長楕円形である。長軸方向はN-46° -E、規模は開口部で長軸(315)cm、短軸36cmで、検出面からの深さは17cmである。なお、調査区境界の壁面で確認できた深さは100cmある。底面はほぼ平坦で、壁は開くように立ち上がっている。

[堆積土] 5層に分層した。黒褐色土、暗褐色土を主体とする。

第8号溝状土坑 (SV08、図8)

[位置・確認]P、Q-15、16グリッドに位置している。

[形状・規模]平面形は細長い長楕円形である。長軸方向はN-32° -E、規模は開口部で長軸357cm、短軸36cmで、検出面からの深さは44cmである。底面は両端が若干高くなっており、壁は開くように立ち上がっている。

[堆積土] 3層に分層した。黒褐色土、暗褐色土を主体とする。

第9号溝状土坑 (SV09、図8)

[位置・確認]N-20グリッドに位置している。

[形状・規模]平面形は長軸上の両端が膨らむいわゆる鉄アレイ型である。前述したが、本遺構のみ長軸方向が西へ傾いており、N-22° -Wである。規模は開口部で長軸301cm、短軸は北側膨らみ部で46cm、中央21cm、南側膨らみ部で60cm、検出面からの深さは80cmである。底面は約6° の角度で南東側へ傾き、壁はオーバーハング気味に立ち上がっている。

[堆積土] 3層に分層した。黒褐色土、暗褐色土を主体とする。

第10号溝状土坑 (SV10、図8)

[位置・確認] K-6、7グリッドに位置し、調査区外へ遺構の一部が伸びている。

[形状・規模] 平面形は細長い長楕円形である。長軸方向はN-2°-E、規模は開口部で長軸(231)cm、短軸21cmで、検出面からの深さは40cmである。なお、壁面で確認できた深さは118cmある。底面はほぼ平坦で、壁は開くように立ち上がっている。

[堆積土] 5層に分層した。黒褐色土、暗褐色土を主体とする。

第2節 遺構外出土遺物

遺構外から破損した磨製石斧が1点出土した。緑色凝灰岩を素材としている。刃部形状は両刃の偏刃状で、器面には擦切痕の末端部分と思われる痕跡もある。大きさは(40)×45×16mmで、重さは35.4gである。

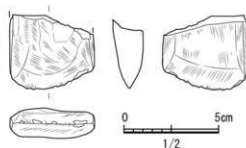


図6 遺構外出土遺物

表2 遺構計測表

遺構名	検出位置	検出面	長軸方向	計測値 (cm)			分層	備考
				上端	下端	深さ		
SV01	R、S-12、13	Ⅲ層中	N-36°-E	361×33	348×19	56	3	
SV02	S、T-11、12	Ⅲ層中	N-28°-E	372×46	345×20	80	5	
SV03	O、P-13、14	Ⅲ層中	N-26°-E	344×23	333×15	32	1	
SV04	L、M-9、10	Ⅲ層中	N-34°-E	367×23	346×8	70	3	
SV05	Q、R-8、9	Ⅲ層中	N-28°-E	376×26	360×9	49	2	
SV06	N-7、8	Ⅲ層中	N-53°-E	336×23	323×8	58	3	
SV07	M-6、7	Ⅲ層中	N-46°-E	(315)×36	308×16	17	5	壁面での深さ100cm
SV08	P、Q-15、16	Ⅲ層中	N-32°-E	357×36	336×17	44	3	
SV09	N-20	Ⅲ層中	N-22°-W	301×21(中) ×46(北側) ×60(南側)	289×6(中) ×26(北側) ×43(南側)	80	3	
SV10	K-6、7	Ⅲ層中	N-2°-E	(231)×21	232×9	40	5	壁面での深さ118cm

表3 遺物観察表

器種	出土位置	層位	石質	計測値 (mm)	重さ (g)	備考
磨製石斧	V-18	カクラン	緑色凝灰岩	(40)×45×16	35.4	

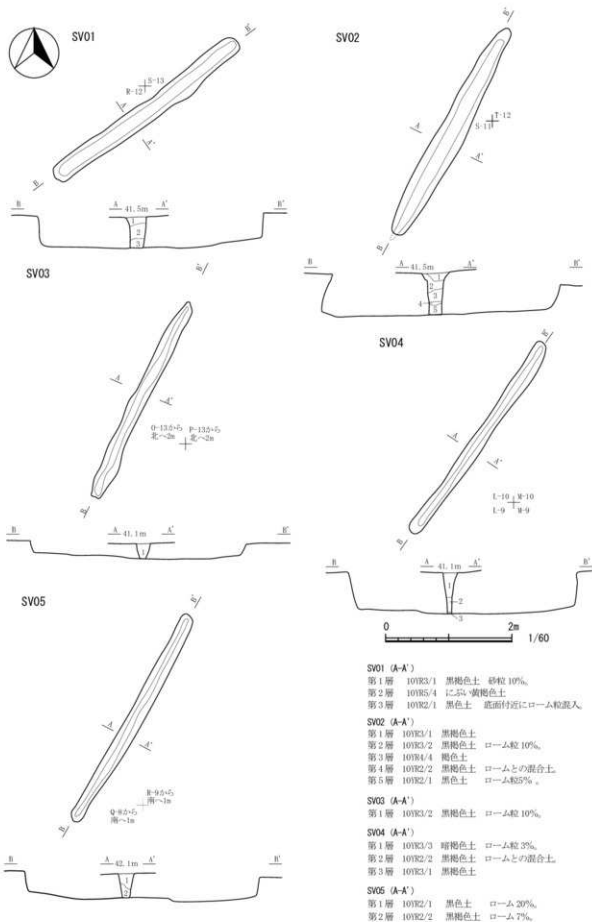
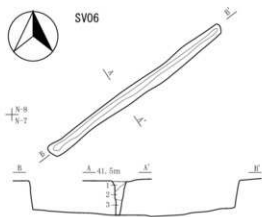
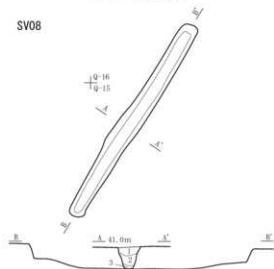


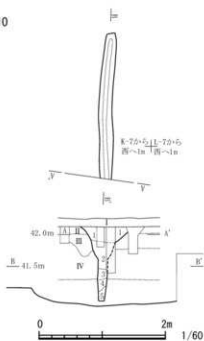
図7 溝状土坑(1)



SV08



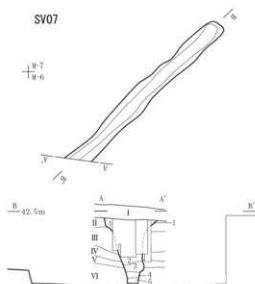
SV10



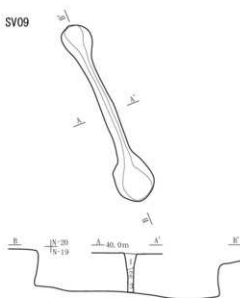
SV06 (A-A')

- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 ロームとの混合土
第2層 10YR2/1 黒色土 ローム2%
第3層 10YR2/2 黒褐色土 ローム5%

SV07



SV09



SV07 (A-A')

- 第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム5%
第2層 10YR3/2 暗褐色土 ロームとの混合土
第3層 10YR3/1 黒褐色土 ローム5%
第4層 10YR2/1 黒色土 ローム1%
第5層 10YR4/4 褐色土 ローム主体土(壁の崩落土)

SV08 (A-A')

- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム1%
第2層 10YR3/1 黒褐色土 ローム5%
第3層 10YR2/1 黒色土 ローム3%

SV09 (A-A')

- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム1%
第2層 10YR3/2 黒褐色土 ローム3%
第3層 10YR3/4 暗褐色土 ローム1%

SV10 (A-A')

- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム1%
第2層 10YR2/3 黒褐色土 ロームブロック30%
第3層 10YR3/2 黒褐色土 ローム3%
第4層 10YR4/4 褐色土 ローム主体層(壁の崩落土)
第5層 10YR2/2 黒褐色土

図8 溝状土坑(2)

第4章 総括

吹越(2)遺跡は、吹越川南岸の標高約40m付近の河岸段丘上に立地している。調査の結果、10基の溝状土坑と破損した磨製石斧1点が出土し、縄文時代に本遺跡周辺が狩猟場であったと考えられる。

引用・参考文献

- 青森県 2013『青森県史資料編考古2 縄文後期・晩期』
- 青森県 2017『青森県史資料編考古1 旧石器縄文草創期～中期』
- 青森県教育委員会2000『モダシ平遺跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第271集
- 青森県教育委員会2021『林ノ脇遺跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第620集
- 青森県教育委員会2021『百目木(3)遺跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第622集
- 横浜町史編纂委員会1982『横浜町郷土史年表』
- 横浜町教育委員会1983『松木遺跡発掘調査報告書』
- 角鹿扇三・渡辺兼庸1980『角鹿扇三蒐集考古学資料集』
- 瀬川滋2006『むつ湾東岸域に所在する製塩窯跡』



吹越(2)遺跡から北方向を望む。

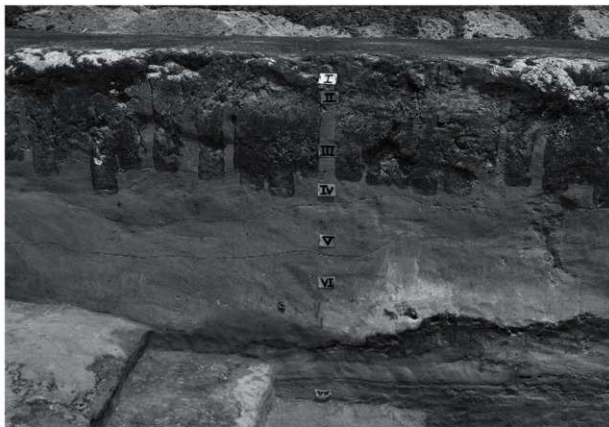


吹越(2)遺跡から南方向を望む。

写真1 遺跡位置



調査区全景 直上→ (写真上が南)



基本土層 南→

写真2 調査区全景、基本土層



SV01 完掘 南→



SV02 完掘 南→



SV03 完掘 南→



SV01 土層 南→



SV02 土層 南→



SV03 土層 南→



SV04 完掘 南→



SV05 完掘 南→



SV06 完掘 南→



SV04 土層 南→



SV05 土層 南→



SV06 土層 南→

写真3 溝状土坑(1)

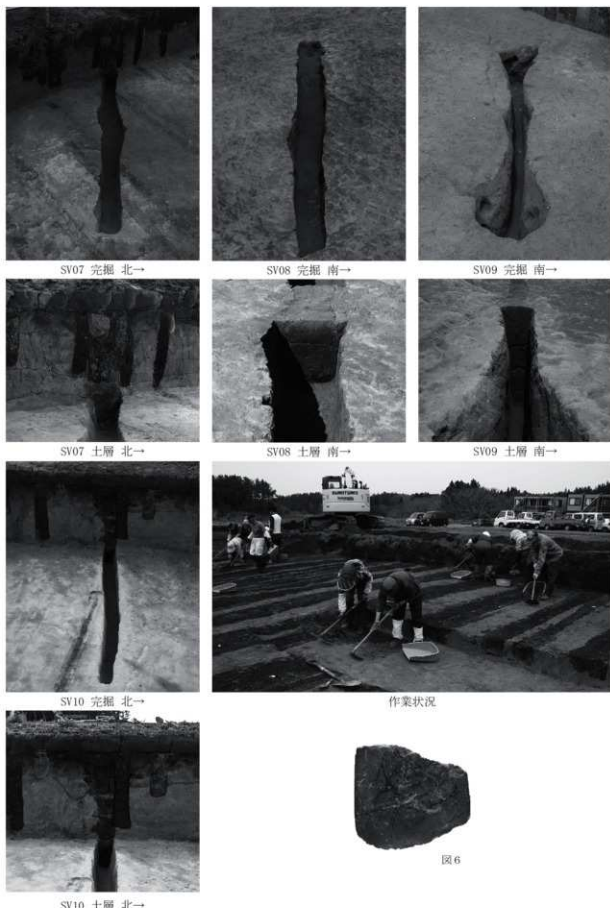


写真4 溝状土坑(2)、作業状況、遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ふっこしかっこにいせき							
書名	吹越(2)遺跡							
副書名	国道279号横浜南バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第628集							
編著者名	小山浩平							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2022年3月16日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系 (JGD2011)		調査期間	調査 面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ふっこしかっこにいせき 吹越(2)遺跡	あomorikēn 青森県 かみきたぐん 上北郡 よこしまち 横浜町 あまほこしちまかい 字吹越地内	02406	406030	41° 1′ 30″	141° 15′ 25″	20200507 ～ 20200626	3,500	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
吹越(2)遺跡	狩猟場	縄文時代	溝状土坑	10	磨製石斧			
要約	吹越(2)遺跡は、吹越川南岸の標高約40m付近の河岸段丘上に立地している。調査の結果、10基の溝状土坑と破損した磨製石斧1点が出土し、縄文時代に本遺跡周辺が狩猟場であったと考えられる。							

青森県埋蔵文化財調査報告書 第628集

吹越(2)遺跡

—国道279号横浜南バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2022年(令和4年)3月16日

発 行 青森県教育委員会

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15

TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702

印 刷 青森コロニー印刷

〒030-0943 青森県青森市大字幸畑字松元62-3

TEL 017-738-2021 FAX 017-738-6753
